

7. 叙階の秘跡

B. ノヴァク（神言会司祭）

7.1 旧約時代の司祭職とその限界

イエス・キリストのことをはじめ、イエス・キリストが集めてくださった教会や、この教会の典礼などを理解するために、旧約の時代のいろいろな人物、その行動や言葉、また、様々な出来事、イスラエルの法律や制度などを見る必要があるように、叙階の秘跡を理解するために、旧約の司祭職を見る必要があります。すべての国民の中から神の民として選ばれたイスラエルの民は、「あなたはわたしの僕、イスラエル／あなたによってわたしの輝きは現れる、と。・・・わたしはあなたを国々の光とし／わたしの救いを地の果てまで、もたらす者とする。」（イザ 49,1-6）と神に言われ、「祭司の王国、聖なる国民」（出 19,6）とされました。

しかし、神はイスラエルの十二部族の一つであるレビ族を選び、典礼の務めという特別な使命を与えました。このようにすべてのイスラエル人の中から選ばれた祭司たちは、「罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命され」（へブ 5,1）たのです。

「しかし、神のこぼれを告げ、いけにえと祈りとによって神との交わりを取り戻すために定められたこの祭司職は、救いをもたらす力はなく、たえずいけにえを繰り返す必要があつて、決定的聖化をもたらすことはできなかったのです。ただキリストのいけにえだけが、決定的聖化をもたらすことができました。」（カトリック教会のカテキズム 1540、へブ 10,1-4 参照）

7.2 真の大祭司であるキリスト

人間となられた神の子イエス・キリストにおいて神ご自身が、人間の罪によって生じた無限の淵、しかも、人間は、いくら努力しても、絶対に超えることのできない淵を超えてくださって、人の真ん中に入ってくださいましたのです。イエス・キリストの人生、特に、キリストの十字架上の死は、神の、すべての人々への愛の奉獻（いけにえ）でありながら、ナザレのイエスという一人の人間の、神への愛の奉獻（いけにえ）で、神の愛への完全な応答でした。この二つの完全な愛の相互奉獻によって、人類と神との和解が実現され、すべての人々に神の命と神の愛にあずかる可能性が与えられたのです。このように、神の子の受肉によって始まった人間の贖い、つまり、愛に生きることを不可能にし、人生の目的に達すると同時に、幸せになることを不可能にしていた罪の奴隷状態からの解放は、十字架の奉

献（いけにえ）によって実現し、真の神であり、真の人間であるイエス・キリストの昇天で完成されたわけです。

イエス・キリストが成し遂げてくださった救いとは、三位一体の神の命にあずかること、神との愛の交わりの完成によって、愛そのものである神と一体になることです。完全な愛による永遠の絆によって結ばれた神と人々の共同体のことをイエスは、神の国と呼びました。この意味での救いにあずかるために、つまり、神の国に入るために、私たちは、同じ人間性を所有しながら、神と一体になっているイエス・キリストとつながることが不可欠なことなのです。神と人との間の唯一の仲介者（1テモ 2,5）であるイエス・キリストは、唯一の真の大祭司と呼ばれます。したがって、旧約の祭司職のすべての前表は、イエス・キリストのうちに実現されたと言えるわけです。

7.3 キリスト者の共通司祭職

神によって選ばれたイスラエルの民は、「祭司の王国、聖なる国民」であったように、キリストの神秘的なからだである教会は、真の「祭司の王国、聖なる国民」となり、イエス・キリストによって選ばれ、洗礼を受けることによってイエス・キリストと結ばれた一人ひとりのキリスト者は、キリストの唯一の司祭職に参加しています。これについて、教会は、次のように教えます。「大祭司であり唯一の仲介者であるキリストは、教会を『父である神に仕える祭司の王国』となさいました。信者の全共同体がそれ自体として祭司的団体です。信者は祭司、預言者、王であるキリストの使命にそれぞれの召し出しに応じて参与し、洗礼による祭司職を果たします。信者は洗礼および堅信の秘跡によって『聖なる祭司職をもつ者となるよう聖別されます』」。(カトリック教会のカテキズム 1546)

キリスト者は、諸秘跡にあずかり、キリストご自身の使命に参加することによって、イエスとの交わりを深めながら、洗礼の恵みから発出する信者の共通祭司職を実現しています。そのために、特に、キリストの完全な奉獻の記念であるミサ聖祭に行動的に参加して、様々な典礼奉仕を果たし、ご聖体拝領すること、また、毎日の聖書の読書によって自分自身を神の言葉で養うことと、み言葉に従って生き、自分の身分に応じて、良心的に、勤勉に労働、または、学業に励むこと、また、様々な奉仕の活動や使徒的な活動に参加することなどによって愛を實踐して、キリストを証し、福音を宣べ伝えることが共通祭司職を果たすこととなります。結婚している信徒は、家族の生活、夫婦の愛を育み、生まれた子どもを愛で包みながら、キリストの教えに基づいて育てることをとおしても、神の民を發展させ、共通祭司職を果たしているのです。

すべての信者の共通祭司職以外に、司教および司祭の職位的、位階的祭司職があります。位階的祭司職と共通祭司職とは、「それぞれ独自の方法で、キリストの唯一の祭司職に参加して」おり、「相互に秩序づけられ」ながらも、本質的に異なるものです。・・・職位的祭司職は共通祭司職に奉仕し、すべてのキリスト者の洗礼の恵みの展開を助けるものであり、キリストがたえずご自分の教会を築き導くために用いられる手段の一つです。そのために、職位的祭司職は固有の秘跡、つまり叙階の秘跡によって受け継がれるのです。」(カトリック教会のカテキズム 1547)

7.4 キリストの代理者である司祭

叙階の秘跡を受けることによって一人のキリスト者は、司祭職へと聖別され、唯一の大祭司であるキリストに似たものとなり、キリストご自身の力と名により行動できるようになります。したがって、叙階の秘跡の力によって司祭は、キリストの代理者として行動しますので、「教会的奉仕を果たすときには、キリストご自身がそのからだの頭、その群れの牧者、あがないのいけにえの大祭司、真理の師としてご自分の教会に現存されます。」(カトリック教会のカテキズム 1548) 言い換えれば、叙階の秘跡を受けた司祭をとおして、イエス・キリストご自身が働いてくださり、救いの恵みをもたらしてくださるのです。

けれども、司祭の中にキリストが現存されるからといって、司祭があらゆる人間的弱さから免かれているというわけではありません。ですから、司祭は、誤ることがないとか、いろいろな誘惑や欲に負けず、罪を犯すことがなくて、イエス・キリストと同じように完璧に生きるというような保証はありません。けれども、「秘跡を受ける場合には、その保証があります。したがって、教会の役務者が罪びとであっても、彼らによって授けられた秘跡が恵みをもたらすのを妨げることはありません。」(カトリック教会のカテキズム 1550) 言い換えれば、司祭によって執行される秘跡は、キリストによって定められた行為で、聖霊の力によるキリストご自身の行動ですので、キリストを代理とする司祭の心の状態を問わずに、常に完全な行為なのです。

第二バチカン公会議は、教会の司祭職の理解をまとめ、次のように述べています。「職位的司祭は、自分が受けた聖なる権能をもって司祭的な民を育成し、治め、キリストの代理者として聖体の犠牲を執り行ない、それを民全体の名において神にささげる。」(教会憲章 10) つまり、司祭は、キリストの代理者として、キリストの名によって教え、祭儀をつかさどり、司牧することをとおして神の民に仕えると同時に、神の前で、聖なる民の代理者として祈りやいけにえをささげるので、イエス・キリストご自身と同じように、神と人間との間の仲介者であると言えるのです。

ナジアンズの聖グレゴリオは、司祭職について次のように語りました。「〔司祭とは〕真理の擁護者であり、将来は天使たちと並んで立ち、大天使たちとともに神を褒めたたえ、天上の祭壇にいけにえをささげ、キリストの祭司職を分かち持ち、被造物を改造し、〔人に神の〕似姿を取り戻させ、天の国のためにそれを造り直す者となるのです。そして、そのもっとも偉大な点を述べるとすれば、司祭は、将来は自分自身が神化され、他の人々をも神化させるのです」。また、アルスの主任司祭聖ヨハネ・ビアンネはこうも言いました。「この世であがないのわざを続けるのは、司祭です。…人はこの世で司祭が何であるかを本当に理解すれば、恐れの手ぬえではなく、愛の手ぬえに死ぬでしょう。…祭司職とは、イエスの心の愛です」。

7.5 叙階の秘跡の三つの段階（司教、司祭、助祭）

・司教

司教聖別によって、最高の司祭職、聖なる役務の頂点と呼ばれている叙階の秘跡の充満が授けられます。司教は、聖化の任務とともに、教える任務と治める任務をも授けられ、すぐれたそして見える方法で、師・牧者・大司祭であるキリスト自身の代理者となり、その役目を受け持つ者となりますが、教える任務と治める任務は、司教団体の頭ならびにその構成員たちとの位階的交わりの中でしか行使できません。そのために、「新しく選ばれた者を叙階の秘跡によって司教団に入れることは、司教たちの務めである。」（教会憲章 21）司教たちは、父から遣わされたキリストによって派遣され、ご自分の聖別と使命とに参与させた使徒たちの後継者です。

・司祭

司教の奉仕の任務は司祭たちに伝授されています。こうして、司祭たちは、キリストから託された使徒的使命を正しく果たすために、司教団の協力者となっているのです。

・助祭

助祭は、聖職位階の下位の段階にあり、「司祭職のためではなく、奉仕のために」叙階の秘跡を受けます。助祭は秘跡の恩恵に強められて、司教およびその司祭団との交わりの中で、典礼とことばと愛の奉仕において神の民に仕える。助祭が行う務めは、「荘厳に洗礼式を執行し、聖体を保管し、分け与え、教会の名において婚姻に立ち合い、祝福し、死の近くにある者に聖体を運び、信者たちのために聖書を朗読し、人々に教え勧告し、信徒の祭礼と祈りを司会し、準秘跡を授け、葬儀と埋葬を司式する」（教会憲章 29）ことです。